

観音菩薩の宗教

12

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

観音の浄土・補陀落

観音菩薩は三十三観音や変化観音のほか、ターラー（多羅）菩薩を産み出すなど、バリエーションが多い。あえてIT用語を借りれば、拡張性の高い菩薩である。しかしそれほど拡張性の高い観音菩薩とはいえず、三千大千世界といわれる無数の世界の衆生すべてを救うのは難しい。

その闇を補うかのように大乘仏教では、観音菩薩のほかに多くの仏菩薩が現れて衆生を救うとされる。これを多仏思想という。それぞれの尊格は、得意分野や活動範囲を持っており、多様な世界に対応している。総じて仏菩薩は融通無碍に時空を超える力を持つが、それぞれ本拠地とでもい

うべき住所を有している。十方すなわち東南西北の四方と、そのあいだの四維、これに上下を加えた全方位には、固有の尊格が住所として存している。と信ぜられてきた。こうした仏菩薩の住所を大乘仏教では浄土もしくは仏国土という。

例えば、東方琉璃光世界の薬師琉璃光如来、東方妙喜国の阿閼如来、上方兜率天の弥勒菩薩、娑婆世界の釈迦牟尼如来などである。なかでも死に面した衆生を浄土に導く阿彌陀如来の西方極楽世界、自らの悪業によつて地獄に墮ちた亡者を救う地藏菩薩が広く知られている。

観音菩薩が住所を持つことも例外ではなく、『華嚴經』

「入法界品」によると、「於此南方有山名補陀洛迦。彼有菩薩名觀自在（実又難陀訳）」とある。和訳すれば「南に山があつて補陀洛迦と名づけられている。そこに菩薩がいちつしやり、観自在と呼ばれている」となる。補陀洛迦は補陀落・普陀落と書かれることもあり、サンスクリット語のポータラカ（Potalka）の音写であるインドの仏教学者学者ローケーシュ・チャンドラによると、ポータラカとは南インドのタミール系言語のカンナダ語などで「光明」を表す語だとされる（『The Thousand-Armed Avalokitesvara』, Abhinav Publications, 1988）。その意を汲んだのが仏陀跋陀羅訳の『華嚴經』で、そこでは「於此南方有山名曰光明。彼有菩薩名觀世音」とあり、補陀洛迦が「光明」と漢訳されている。続いて『華嚴經』は、「観音菩薩はこの山の中で金剛宝座の岩



補陀落渡海の船出を描いた「熊野那智参詣曼陀羅」。熊野那智大社蔵。江戸期

唐の時代にインドに渡つた玄奘三蔵は、その旅行記『大唐西域記』の中で、「布呾落迦山は僧伽羅国」にあると推定した。僧伽羅国とは、シンハラ国すなわち現在のスリランカを指す。サンスクリット語のシンハラ（sinhala）の語源は「ライオンを持つ国」で、後に「ライオンを打ち負かす者」を意味するようになった。スリランカはサンスクリット語のシュリー・ランカーで、めだたい島の意味である。この『大唐西域記』の記述により、玄奘が天竺を旅した七世紀のインドでは、観音菩薩の浄土がポータラという南の山で、それ

がスリランカと信じられていたことがわかる。仏典やインド神話に登場する土地は、しばしば現実の地理が反映する。世界の中央にそびえる山と信じられる須弥山（妙高山・スメール）はヒマラヤの神話的反映とされるし、後期密教の『時輪タントラ』に説かれる理想の仏教国がロシア人の学者レーリヒによつてモングルに「発見」された。ポータラカがスリランカに比定されたとしても不思議はない。こうした信仰は、『華嚴經』の普及とともに、各地に広まつていった。

チベットにおいてポータラカはそのままポータラと発音され、最高指導者たる歴代ダライ・ラマの住居兼政庁の名称として採用された。それがポータラ宮である。ポータラ宮はチベットが中国共産党に占領されるまで、ダライ・ラマ政府によつて用いられていた。この宮殿にポータラの名称が使われたの

は、ダライ・ラマが観音菩薩の化身（チベット語でトウルク）と信じられているからである。一九五九年にダライ・ラマ十四世がインドに亡命して以来、ポータラ宮にダライ・ラマは不在となった。現在は、主なまま布達拉宮と漢字で記されており、ユネスコの世界文化遺産に登録されている。ポータラカの思想は、日本において補陀落渡海と呼ばれる特異な信仰と習俗を生んだ。補陀落と想定された観音浄土への往生を願つて生きたまま船出する宗教的な行為である。文献で確認できるのに従えば、北は茨城県那珂湊から鹿児島県加世田にいたるまで、日本各地で九世紀半ばから十八世紀初頭まで実践されていた。なかでも和歌山県の熊野那智の海岸は補陀落渡海の日本最大の母港であった（根井淨『観音浄土に船出した人びと』吉川弘

文館）。『日本書紀』にイザナミが熊野に葬られたとあるように、熊野地方は古代より常世の国、黄泉の国と考えられていた。十一世紀中頃より熊野三社という神社の連合体が形成され、それらを結ぶ参詣道がつくられた。千手観音を本尊とする天台宗の補陀洛山寺と併せ、この地方は古代より神仏習合の浄土であった。『紀伊風土記』によれば、補陀洛山寺の観音像は、紀伊の浜の宮の海上から拾い上げられたとされる（『前掲書』）。こうした宗教的背景のもと、八六八年から一七二二年のあいだ、補陀洛山寺の住職が補陀落渡海を実践したと『熊野年代記』は伝えている。年代記や公式記録から渡海した僧の心中を推し量るのは難しいが、それを文学者の目から活写したのが井上靖の『補陀落渡海記』である。他者に表出されない心の悩みや恐怖、寂しさを描かせることに傑出した井上靖



八王子市仏教会 成道会 十二月十二日

高尾山報 編集委員会

には、小品ながらも名作が多い。日本語を忘れてしまった唐への留学僧の悲しみを語つた『僧行賀の涙』とともに、『補陀落渡海記』は宗教文学の傑作といつてもよからう。補陀洛山寺の信徒たちは、住職が密閉された船に乗り出帆することを有り難いものと期待し、その僧侶の名も宗教的偉人として記憶される。そこに満ちているのは山本七平のいう空気であり（『空気の研究』文春文庫）、小室直樹のいうニューマであつて（『日本国民に告ぐ』WAC文

庫、もはや個人の思想を離れた強い力となつてい。補陀落に往生するとはいえ、実際には渡海は死を意味する。現代なら自殺であり、信徒は自殺補助である。六十一歳で渡海することになった住職の金光坊は、周囲の期待をよそに内心、死の恐怖と生への執着を抑えきれなかった。『補陀落渡海記』は、金光坊の揺れ動く心と回りを囲む人々のドラマチックな行為を描いたもので、日本における補陀落思想の一端を描いた名作である。